

花嫁人形

佐々木丸美



人形

佐々木丸美



講談社

花嫁人形

一九七九年二月二四日 第一刷発行・一九八一年八月二八日 第五刷発行

著者—佐々木丸美 ささき・まるみ

装幀—味戸ケイコ

発行者—三木 章



発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二二

郵便番号 一一二 電話東京〇三(九四五)一一一—大代表 振替東京八一三九三〇

印刷所—信毎書籍印刷株式会社

製本所—藤沢製本株式会社

定価—八八〇円 落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。

© MARUMI SASAKI 1979 Printed in Japan

0093-306042-2253 (1) (㊄2)

花嫁人形

昭菜と名づけられた私。

本岡家で生きるにはその名はあまりにも重すぎた。よじれた運命の荷車は哀しき禁断の愛を引いてコトコト進む。遙かな幸の灯火をめざし私はひとり雪道をさすらう。

父は北一商事代表取締役。温厚で子煩悩で社会的信望のあつい人格者だった。母は美しく従順で、父への信頼を人生の床石として生きてきた人だ。四人の姉妹は父母の愛の揺りかごで何不自由なく育ってきた。幸福に満ちた家族の中で私ひとり異端児だった。父も母もかならず「四人も娘がいて」と人に語り、姉たちも「四人姉妹です」と人に答えた。私は家族の数に入っていなかった。

母の実弟が同居していた。大学生になった時に越してきた。姉妹たちのよろこびようは大変なものだった。いきな

*

り兄さんができるようなものだ。大騒ぎの果てに部屋の調度品や食卓の席順が決まった。父母の意見もかんじんの叔父の意志も無視して万端ととのえられた。私も秘かに心を躍らせた。孤立した家族の中で叔父だけは時々優しい微笑をくれたから。決まってそばに誰もいないときだった。それは自分の身の上に照し合わせてみると意味ある暗号のようだった。

兄のように若い叔父を慕う姉妹たち、ものかげで息をひそめてそれをながめる私。平和な本岡家に小さなさざ波がたったのはこのときからだ。幼い想いは幼い波をつくり、想いの成長とともに波も大きくなった。ひとつふたつと波紋は広がり、やがて荒れ狂う心の海と化したのだ。

叔父は末っ子の織ちゃんを一番愛した。いつも肩車にのせて庭を散歩し絵本を読んできかせた。織ちゃんも父や母よりも叔父がよくて、食卓の席も隣、部屋も隣、何でもかでもそばにびったりいなければおさまらなかった。「大きくなったらおじさんのお嫁さんになるの」と言ってみんなを笑わせた。無邪気で健康で思わず顔がほころぶほど愛らしい。両親の愛も姉の愛も叔父の愛もおよそすべての幸福

を一身に集めていた。同い年でありながら彼女が光ならば私は影、ひっそりとながめては「いいな、織ちゃんは」とつぶやくだけ。

織ちゃんに宿敵がいた。いとこの奈津子さんだ。同い年なのにかなり大人びて口も腕力もかなわない。叔父が同居するようになるのとひっきりなしに遊びに来た。おじさんおじさんとべったり糊のように張りついた。織ちゃんが妬けば尚さらからみついた。「織ちゃんなんかどんなに大きくなってもおじさんと結婚できないのよ、わたしは血がつながっていないから結婚できるの。おじさんのお嫁さんは私になるのよ」と言ってみく泣かせたことがあった。以来織ちゃんは異常なほど叔父から離れなくなった。お嫁さんになるという響き、それは多分大好きな人の最終的独占権をもつものなのだろう、二人の争いを見るたびに私も揺れていた。

長女の藍ちゃんは奈津子さんがおじさんと結婚すると言うたびに首をかしげる。誰にそんな智恵をつけられたのかしらと。母を助けて家政をとりしきるしっかり者、奈津子さんの姉の聖子さんと時々口論するけれどかならず負かしてしまふ。仲よしのいとこ同士でも叔父のことになると角

*

が出る。

次女の郁ちゃんはその点大らかだった。子供の言うことに姉が口ばしを入れることもないわと笑う。姉妹の中では一番美しくおとなしい人だった。そして叔父に勉強をみてもらうのも相談するのも一番多かった。父や母よりも叔父を頼っていたようだ。私は姉たちの中で郁ちゃんが好きだった。

三女の詩ちゃんは姉たちと全く異り、何もかも口に出す人だった。聖子さんと全くつり合いのとれた喧嘩相手だった。

「冗談じゃないわよ奈津ちゃん、あなたみたいなおチビちゃんにおじさんを横取りされてたまるものですか。血がつながっていないから結婚できるなんて誰に智恵をつけられたの!? 聖子さん、あなたに断っておくわ。おじさんはこの家を継ぐのよ、将来はお父さんに代わって会社を経営していくのよ」

「彼を一人占めさせないわよ、本岡一族のたった一人の大黒柱なんですからね。大学だって本当は私の家の方が近いのに無理矢理こっちに住まわせてしまつて、お父さん怒ってたわ、何でも勝手に決めてしまうつて」

人が争うときそこにはかならず何かへの愛がある。何かを守るために主張し激怒する。私には守るべき何ものもない。家族としての価値も人生の価値もわからない。まして本岡家の娘としての価値も叔父を慕う姪としての価値もわからない。私にはそれらを考える基準さえもわからないのだ。わかつているのはただ六歳という年齢と昭菜という名前だけ。

私は家族と口を聞いてもらえなかった。

哀しみの形はたくさんあるけれど完全な無視状態に置かれるほど哀れなことではない。

もの心ついたときはすでに無言の金網で仕切られていた。病弱なため部屋にこもり寝たり起きたりの日も続いた。具合が悪いのかと聞いてくれる者もなく、いつしか私は家族とはこういうものなのだと思った。多分私は本岡家の人間ではないのだろう。その上に青白い顔の病人ときては嫌われて当然、さらに私は学校に行かなかった。母は好きなようにしなさいと言っただけ。「昭菜は体が弱いから」と何もかもこの一言でかたづけられた。いじめられることはなかったけれど淋しかった。学校に行かないからといって

*

読み書きを教えるわけでもない。大人の庇護を受けない子供がどれほど誤った人生を歩むのかをあとになってつくづく考えたものだった。食事をしていても居間でくつろいでいても、両親と姉妹は楽しそうに語り私は独りで聞くばかり。こつちから話しかけると短い答えだけでまた無視された。いつとは知らずみんなの輪から外れて一人で遊ぶようになった。しかし家族を恨むつもりはなかった。私を無視するだけであって他はこの上もなくいい両親と姉たちだった。それだから尚、言いに言えない哀しみが渦巻いていた。

奈津子さんは私に言いたい放題を言ってきた。事あるごとに「字も読めないくせに」とののしかった。両親も姉たちも何も言わないのになぜ彼女が辛く当たったのかわからなかった。しかし奈津子さんの投げつける誹謗（ひぼう）によって初めて字も読めない愚かさを計ることができた。食事をしてると「字も読めないくせにお腹が空くのは一人前ね」と言う。お菓子を分けてもらおうと「計算もできないくせに目が光ってる、すごいねえ」と言う。返す言葉もなく戸惑った。そしてそんな奈津子さんを咎（とが）めることもしない父と母にもっと戸惑った。何も言わないのがどれほどむごいことか思い知らされた。

クリスマス・イブの贈り物が次々と渡されていく。みんな私の目の前を通りすぎた。聖子さんが「コソコソ盗み見たってプレゼント、なんかないのよ」と笑った。叔父が織ちゃんと奈津子さんに本を贈った。

「きれいな絵ね。どうもありがとう。おじさん、これ何ていう字？」

「ミ、だ」

「ロミオとジュリエット？ 全部読めたでしょう？ そうじゃないかと思ったわ、だってこの間お話ししてくれた物語に似てる。字を読む前にわかったわ」

「絵本というくらいだからな」

「じゃあきなにもわかる？」

みんな笑った。聖子さんが「気にしているらしいわよあれでも、無学の者ほど敏感だって言うじゃないの、試しにその絵本を見せたらいいわ、絵だけで物語がわかるかどうか」と言うときまたみんな笑った。私は立ち上がった。目まがいとした。笑われたせいなのか父たちが聖子さんを肯定しているせいなのか。歩いたのか走ったのか、気がついていたら暗い部屋にぼつりと座っていた。叔父の笑い声だけがいつまでもこだました。字を知らない自分が悪いのだ。恨みは

*

しないけれどこのままではいいはずはない。誰も教えてくれないなら自分で学ばなくてはならない。窓にはこな雪が降っていた。はらはらとぶつかっては闇に消えてゆく、名もない痛みを乗せた無学の小舟は雪の闇へとすべり出した。あたかも吹雪の海に白い教科書が綴られているかのよう。胸の痛みが教師、孤独が筆。昭菜よ学べ、誰も教えぬ人の世の悲哀を。学問は心の絵文字、まず心を起こせ、涙の火種を見よ。カサカサと鳴る雪はそうささやいた。

叔父はみんなの前では冷たい人だった。誰もいなければ優しくかった。二つの心をもつ叔父がわからなかった。少なくとも六歳の智恵では理解できなかった。私がもう少し明るい性格なら、おじさん私も勉強したい、と言えただろうに。

廊下の高い窓が何やら光っていた。

よく晴れた凍れた日には決まって見える。両手に息を吐いてあたためながら見つめていた。するとむこうから叔父が歩いてきた。まだ外出していなかったの？ セーター姿でコートを片手に持っている。

「何を見ていたの？」

「お花」

叔父は窓を見た。微笑を浮かべて頷いた。

「結晶のことか？」

「けっしょう？」

私を抱きあげてすぐ近くで見せてくれた。

「きれいだね」

「うん」

「雪の花は寒い日にだけ咲くんだよ」

大きくてあたたかい掌がかじかんだ指をつつんだ。そしてその指を花の一つに押し当てた。ガラスはナイフのように冷たくて切れそうだった。

「なくなった」

「あたたかくすると枯れてしまうんだよ」

ちがう。おじさんの手の中に入ってしまったのよ。心の中で言った。すると叔父は「またすぐ咲くよ、今度は昭菜の心の中に」と言った。こんなにきらきら光るお花が？ 思わず笑った。叔父も笑った。腕から私を降ろすと時計を見た。片手をあげて「行ってくるよ」と言った。織ちゃんに言うように優しい声。雪の花という言葉は二人だけの秘密。溶けて消えた花はおじさんの手の中に、昭菜の心に。

*

二つの暗号は孤独の海が枯れるほどの幸福だった。

年が明けると織ちゃんはカルタに熱中した。座敷の真ん中で同じ絵カルタをくりかえす。何度やっても織ちゃんが一番早い。絵を見て取っているからだ。そこへ叔父が新しいカルタを買ってきた。「もう一年生だぞ、字を読んで取りなさい」と。織ちゃんはたちまち熱中した。わずかの間に完全に字を覚え詩ちゃんたちと同じくらい早く読めるようになった。今までは一字ずつたどどしく読んでいたのに。それを知った父はたいそう誉めてまた新しいカルタを与えた。今度は易しい漢字まじりだった。これも叔父がくりかえし相手をしてとうとう全部覚えてしまった。みんなに誉められて得意になった。

「奈津ちゃんよりえらい？ ねえ、おじさんてば」

「また始まった」

「奈津ちゃんと私どっちが好き？」

「織が好きさ」

「大きくなったら結婚する？」

「いいよ」

ひざをよじのぼって甘える。父も母も目を細めて見守っ

た。一日一度はおじさんと結婚すると口にする。うっかり駄目だと答えようものならたちまち大粒の涙をこぼし、「奈津ちゃんが好きなのね」と泣きじゃくる。どんなに風が吹いても吹雪いても織ちゃんは学校へ行った。いやだと言つても父が赦さ^やない。叔父も叱る。甘つたれ織ちゃんがそんなにしてまで行かされる学校なら私も行くべきではないだろうか？ 病気がちで行きたくないと言えばあつさり行かなくてもいいと答えた母をふりかえる。しかしそこに答えはない。昭菜、学校へ行かなければだめだよとは誰も言わない。そこにも答えはない。それだからといってこの現状にも答えはない。

私は毎日織ちゃんのカルタ遊びを障子のかげで見っていた。叔父はくりかえし「読みあげるはじめの言葉の字が書いてあるんだよ、きれいな花だからこれは、きという字だ」と教えた。「わかっているってば」と口をとがらせた。

しかし叔父はしつこいほど読み言葉と絵の文字をくりかえした。やがて織ちゃんはカルタに飽きた。惜しげもなく折ったり傷つけたりした。

カルタ遊びをしなくなると私も座敷へは行かなくなつた。ある日私の部屋の近くのチリパケツに箱ごと捨ててあ

*

つた。びっくりして中をのぞいた。箱から一、二枚はみ出している。まわりに誰もいないのを確かめてから手にとつた。犬の絵だ。折れている角をのぼすと犬の耳もぴんと立ったようだ。うれしくて笑った。わたしのかわいいシロ、とおじさんが読みあげていた。次は？ 花だ。チューリップに目がついていてばっちりところちを見ている。一枚、二枚と拾いあげついに箱ごと持ち上げた。スカートにかくして廊下を走った。私に玩具はなかった。欲しいと言うと、ぼつりとそれだけ与えられた。カルタも私がそばでうらやましそうにながめていても仲間に入れてくれることはなかったし、これが昭菜のだよと与えられることもない。部屋で床に座ってバラバラとまいた。向い側にクッションを二つ並べた。これがおじさん、こっちが郁ちゃん、三人で始める幻のカルタ会、私にはにこにこ笑っていた。

淋しい心のまま桜が咲き枯葉が舞いこな雪が降る。九歳の目に映るのは孤独の色ばかり。

織ちゃんは小学三年生。詩ちゃんは中学生に、郁ちゃんと藍^{あゐ}ちゃん高校生に。叔父は就職試験を考える頃になつ

た。

日々はとりとめもなく流れた。

冬の陽だまりで母が編物をしている。ペランダの揺り椅子にゆったりと身を沈めながら。そばで柱にもたれて見ている叔父。ジーンズのポケットに両手を入れて少しまぶしように、かちりと光る編棒をながめている。

「姉さん、昭菜のこともう少し気を配ってやれよ。あのままではいじけてしまう」

母は黙っていた。針に糸をかけるたびに肩が少し動く。

叔父の声は沙漠の雨のように私にしみ通った。

「うっかりしていると飯も食べてない日がある。服や玩具はともかく腹を空かせるのは可哀想だ。誰にも何も言えないうち疎外感をつくったのは姉さんの責任だぞ」

「放っておいても育ちますよ、昭菜はそういう子です」

「他人の娘は愛せないか」

「そんなわけはありませんよ。ただあの子が昭菜だから何もかもが大儀なの。五人いた娘が一人欠けて、その穴埋めのようにひょっこりやってきた子だからといって愛せるものではないし。壮嗣も親になればわかるわ」

北の空から雲が流れてきた。母の手もとをうす暗くつつ

*

んだ。私は廊下を戻った。放っておいても育つ子と言った。他人の娘は愛せないかと言った。ほんの小さなざざ波が立っただけ。私はやはり本岡家の娘ではない。父や母の私への扱いは正しい、両親を逆恨みしてはならない。私もまたこの家の人々に干渉してはならない、無視されるなら私も相手を無視すべきだ。決して恨みつらみではなくそれが唯一の哀しみからの逃避手段なのだ。姉妹たちとの摩擦を断って捨てるには無視相殺の構えしかない。母の気だるい声の中に黒々と罅を巻く人生の潮を直感した。あたたかい炎を秘める叔父の声に遙かな愛の灯台が見えた。

体調は一進一退。微熱がつづいた。ベッドから離れられず食事にもお風呂にも行かなかった。白い紙に字の真似を書いて遊んだ。おじさん、あきな、の言葉をまっ黒くなるまで書きつづした。字を覚えるにはどうしたらいいのかしらとぼんやり考えたり、このまま部屋から出て行かなければ死ぬまで誰も見に来てくれないのかしらと思ったり、本当に死んでしまえば父や母はどんな顔をするかなどと想像しては笑った。どこかに残る親への甘え、かすかに匂う母のやさしさ、理性だけで斬り捨ててには幼なすぎた。二日目の夕方に郁ちゃんが入ってきた。熱を計り熱いミルクを

飲ませてくれた。ご飯は食べられなかった。「お医者さんへ行くか？」とのぞきこんだ。きっぱりと首を振った。

「注射がこわい？」

「うん」

優しく笑って頭を撫でた。わずか一瞬の姉の姿。ドアの外へ出るとたちまち冷たい姉妹の群に混る。母と同じように姉たちも何か理由があつてこうしているのだろう。

一番好きな人がおじさん、一番やさしい人がおじさん、一番こわい人がおじさん。これは織ちゃんの口ぐせだった。彼女にとって叔父はすべてだった。甘ったれてはいたけれどいったん怒ると父よりも恐い叱り方をするのをよく知っていた。ずっと前に我まがすぎて張りとはされたことがあつた。以来、叔父の言いつけは何よりも優先して守ってきた。ところが今日になってそれを忘れた。織ちゃんとはこっぴどく叱られた。叔父の就職先が原因だった。

叔父は遠い広島に就職するという。採用通知を受けてから家族に告げた。父は北一商事に入れようとし奈津子さんのお父さんは東邦産業に入れようとしていたのに。さすがに母は無断で他社の就職試験を受けたことを叱った。

*

織ちゃんのショックは大変なものだった。泣いて泣いて泣き通しついにご飯を食べなくなった。「このまま死ぬの」と言った。決心はかたく本当に食事をとらない。二日目に母がおろおろした。

「壮嗣、なんとかしてちょうだい」

「腹を空かせるのもいい菓だ」

どんなに泣いても叔父の広島行きを変えられない、そう言われると尚さら激しく泣いた。藍ちゃんが好物のハンバーグを作って運んだ。「お姉ちゃんの意地悪！」と力まかせにお盆をひっくりかえした。とたんに叔父が「馬鹿者！」と怒鳴った。うわあとお姉ちゃんと割れるような大きな声で泣いた。叔父は藍ちゃんを遠ざけて投げつけた盆を拾うように言った。織ちゃんは首を振った。おじさんが遠くに行くなら言いつけをきかないとか、ご飯なんて絶対に食べてあげないとか、さんざん金切り声をあげた。「食べたくなかったら食べなくていい、食べさせてくださいと言えらまで一人で泣いてなさい」叔父はそう言うとき織ちゃんを抱えてペランダの戸をあけた。また庭の奥にある東屋に閉じこめてしまふのかしら、私は身をちぢめて柱にかまっていた。「いや、連れて行かないで、お姉ちゃん助けて！」と

手足をばたばたした。藍ちゃんが止めようとすると「うるさい」と言い、ずんずん庭へ出て行った。悪いことをしたら叔父は決まってこの方法をとる。奈津子さんも時々入れられて朝まで出してもらえなかったことがある。スバルタなのか古風なのかどちらにしても叔父の性格がよくあらわれている叱り方だった。

おじさんどこにも行かないで、と声をつまらせた織ちゃん。叔父は盆をかえした悪さを叱っただけ、それについては答えなかった。冷ややかな静視、その奥にちろりと燃える熱さ。怒っているのか困っているのかわからない。あんなに織ちゃんに優しくかったのにそんなこと全然関係ないかのように置いて行く、仕事ならどんな事でもそれに優先できるものなのだろうか。織ちゃんは叶わぬ力が哀しいのだ。泣こうと笑おうと叔父は自分の好きなようにする。そこには織ちゃんの夢や希望、ひいては小鳩の人生など介在させない強さがある。織ちゃんにとって叔父はすべてだった。しかし叔父にとって織ちゃんは何だったのか。見せかけの愛に私は首をかしげ、これまでの羨望がゆるやかに崩れていくのを見た。

居間に戻ると藍ちゃんが乱暴に叔父の腕をとった。

*

「壮嗣^{つよし}さんは勝手だわ、自分のことばかり考えてポーンと広島へ行くなんて。織が泣くのは当然よ、あんなに叱るなんてひどいじゃないの」

「痛い、はなせ」

藍ちゃんはぎゅうぎゅうしめた、叔父はドサリとイスに転んだ。

「お父さんに断りもなく他社の採用試験を受けるなんて本当にどうかと思うわ。壮嗣さんが高校生の頃から楽しみに待っていたのを知ってるくせに。泣いてるのは織ではなくてお父さんなのよ、壮嗣^{つよし}さん聞いているの!」

「その過大なる信頼が重荷なのさ、おまえたちがいつも叔父さんは短気だから困るって言ってるじゃないか。俺みたいな男が妖しげな雲のたちこめる会社へ行っても野心に食われてべっちゃんこ。知らずに行く戦場ならしかたがないが始めから戦うつもりのところへは行きたくない。痛くて、すごい腕力だな、藍、放してくれよ」

「妖しげな戦場とは何よ? 少しはお父さんを助けようって気にはならないの!」

「義兄^{ぎい}さんの了解とったんだぞ。そんなに言うんなら藍が早くムコをとって安心させてやれ」

言い終らないうちにべちゃんと呼かれた。

藍ちゃんは普段何も言わないけど家の中で何か起こると父母の代弁者となって活躍する。

叔父が遠い土地に就職を求めたのは何らかの理由があった。幼い胸にそれを察知した。私は織ちゃんののように泣きはしない、一瞬の絵として切り替える術を知っていた。幸も不幸も目の前を通りすぎるだけ。クリスマス・プレゼントが目の前を通りすぎて行ったように。無視することだ、それが傷つかない最良の方法なのだ。

それから一週間ほど過ぎた頃、織ちゃんはまだグズグズ泣いていた。叔父が買ってくれた大きな人形を抱いてつぶやきながら。心はうつろですぐに人形を置き忘れて行ってしまう。食堂のテーブルにぼつんと寝かされてあった。みんな座敷のこたつに入ってお茶を飲んでいる。誰も来ないのを確かめてから人形を抱いた。叔父からもらった人形だから羨ましかった。「重たいね、おまえ」そうつぶやいてにっこりした。叔父がいなくなる淋しさ、その心の重さを肩代わりさせたのだ。次の一瞬に人形を放り出した。叔父が立っていた。静かな声で名を呼ばれた。黙っていると放り出した人形を寝かせ直した。そして私のそばにかがみこ

*

んだ。叔父が片ひざを着くのと私が立っているのと同じ高さだった。

「僕がいなくなってもいいか？」

いやだ。

「ご飯のおかわりを言えるかい」

言えない。

「人形を貸してほしいときはきちんと言えるかな」

こっそり触る。全部首を振った。

「自分の思ったことをはっきり言える子にならないけれど。僕は大学を卒業したら遠いところへ行く。でも昭菜がしっかりした子になってくれなければ行けないんだ」

どうして？ 私はまばたきを一つした。「独りぼっちを残して発てないよ」。聞こえないくらい小さな声だった。廊下が騒がしくなり、おじさんおじさんと探す織ちゃんの声。とっさに私は反対の方へ走った。おじさんが私に優しくしてくれるのを誰にも見せてあげない。走って風を切る耳に、はっきり言える子にならないければ駄目だよ、ひとりぼっちを残して発てない、と響いた。やっぱりおじさんは見ていてくれた、ご飯もカルタも人形もあまりの淋しさにカサカサに錆びついていた、そういうものなのだと思って

いた、でも今この瞬間に平凡な涙に染まり、沙漠の砂にたたたくしみていく。これが遙かな愛の序章であつたことを私はずっとあとになって知つた。

孤独の日々は過ぎてゆく。

陽は東に昇り西に落ちる、月は満ちて欠けてゆく、どこかで働く摂理が私の孤独の上に巡るなら、この淋しい日々はやがて喜びに変わる日があるのだろうか。疑問とも期待ともつかない波がよせてはかえしていた。

ある日。私は藍ちゃんに呼びつけられた。ベランダに春の陽光がいっぱい射していた。父と母は雪溶けの庭をながめて語らっていた。少し離れたところに叔父がいた、腕組みをして壁にもたれてガラス越しに空を見あげて。藍ちゃんは対の揺り椅子に私をかせさせた。

「昭菜も今まで色々考えてきたと思うけど私たちも少し考えるところがあったのよ。まだくわしい事情を話してもわからないけど昭菜と私たちは本当の姉妹ではないの。今日まで何んとなく過ごしてきたけどこれからはきちんと区別をつけようと思うのよ。昭菜に今日から家の仕事を手伝っ

*

てもらいたい、そして織たちと自分はちがうんだということを得て逆恨みなどしないように言い渡しておくわ。突然でびっくりしたと思うけどとにかくそのように決めてしまったの、わかってくれたわね？」

はい、と頷いた。それと一緒に椅子も揺れた。ちょうど私の生きざまがグラリと傾いたように。藍ちゃんは叔父に向き直った。

「壮嗣さん、よく聞いておいてね。私がこれから昭菜を働かせたりしつたりしても、あなたが蔭でかばっては何もしないのよ。今後この子の生活に関しては一切口ばしを入れないでね、そのために同席してもらったんだから」

空を見たまゝ「わかったよ」と答えた。横顔も肩も腕も動かなかった。父と母は聞いているのかいないのか庭を見たままだ。二人にとって私よりも庭の方が関心深いのだろう。せめて父の口から私の生活決定を告げてほしかった、娘ではなく他人だという事実も。良かれ悪しかれそれが親と名のつく者の義務だろう。私には事を説明する言葉も惜しいのだろうか。それもよし。今日までの仮りそのめの親と娘、その影絵すら拒絶されて何も言うことはない。二人がそれほどまで私の人生に触れたがらないのなら、私もまた

今日限り二人の人生には触れない、たとえ何が起ころうとも。私と父母との橋は完全に落ちた。働こう。今日まで育ててもらった負債をかえすためにも。廊下を戻りながらふと思う、こんな廊下の端^{はし}で二言、三言で告げられたことを、まるで世間話でもするように軽々しかったことを。哀しみよりも諦めの微笑が浮かんだ。

家事を手伝うといってもただ藍ちゃんのそばでウロウロするだけ。それほど仕事はなかった。目的は姉妹たちとの区別なのだから意地悪されて働かされるということはない。しかし気を張らなければならないのはやはり辛かった。失敗してもうっかり忘れて遊んでいても叱られない。頭が痛いといえば寝てなさいと言う。日曜日など詩ちゃんや織ちゃんが母に甘えて台所にいるので部屋へ帰る、ずるけて隠れたのだ、でも母も藍ちゃんも何も言わない。私はいてもいなくてもどうでもいいのだ。

母がコトコト野菜をきざんでいて指を切った。顔をしかめてエプロンのすそでつつんだ。痛い？ お母さん。そばに行つて母の目を見た。言葉に出せなかったけれど私の心配をわかってくれたはずだ、でも母はスッとしてしまった。何か言ってくれたっていいじゃないの、声が減るわけ

*

でもないのに。相手にされない淋しさは一直線に心にうちこまれていった。

食卓の席からはずされたのはショックだった。イスがなくなっていた。戸棚のかげにぼつりと置かれてあった。そこで独りで食べるようにと暗黙の示唆だった。無視放置の中にちらちらと見える攻撃、その瞬間に私の誇りが火をふいた。理由はどうあろうとこのような扱いを受けて屈服してはならない、私を生んだ両親のためにも。ゆらゆらとやわらかくよぎる実父と実母、私はやつとこのときから自分の出生を思うようになった。奈津子さんの意地悪はかなり応えた。彼女が来るといやがらせのあまり逃げ出して食事もできなかった。そんな日は、藍ちゃんが料理して残った部分をとっておいた。野菜の茎と皮、魚の頭と尾、誰もいなくなつてから好きなように煮たり焼いたり揚げたりして食べた。ないときは食べなかった。空腹をがまんするのは慣れている。藍ちゃんはすぐに気がついた、でも何も言わなかった。疲れきつて眠る夜に以前の孤独な日々と現在とを比べてみた。淋しくてもやはり前の生活が恋しい、食卓でみんなと一緒に輪になっていた日。考えてみればあれは父母の庇護だったのであるまいか、そうでなくなったか